



Title	「街族」を再検証する-「六本木族」「みゆき族」「原宿族」-
Author(s)	市川, 孝一
Citation	文芸研究, 122: (1)-(18)
URL	http://hdl.handle.net/10291/16987
Rights	
Issue Date	2014-02-28
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

「街族」を再検証する

—「六本木族」「みゆき族」「原宿族」—

市川 孝一

はじめに

本稿は、前稿・前々稿（市川、2012, 2013）に続く、戦後の若者文化の再検証の試みの第3弾である。戦後史の中で、ある特定のエリアやスポットに集う、いわゆる「街族」と呼ばれる若者集団が注目を集めてきた。ここでは、そのなかの代表的な事例である、「六本木族」「みゆき族」「原宿族」を取り上げる。時代的には、1950年代後半から1960年代後半までがその検討対象となる。それらの「族」を、この時期の若者をめぐる流行現象という文脈から見て行きたい。

これらの「族」は、一体どのようなものであったのか。本稿でも、前稿・前々稿同様できるだけ当時の新聞記事や週刊誌記事などの一次資料に立ち戻り、その実態と彼らが当時どのように受け止められ、どのように語られていたかを再検討する。

1. 六本木族

はじめに、「街族」の元祖といわれる「六本木族」を取り上げる。まず、その舞台となった「六本木」という街についての検討をしなければならないだろう。

当時の六本木は、現在と比べればまったく別世界の寂しい東京の一地区にすぎなかったという。確かに写真などを見ても、とても東京だとは思えない閑散とした風景が広がっている。しかし、それでも独特の雰囲気を持った特別な街であったことは間違いないようだ。大使館などの「外国公館」がおか

れ、米軍のヘッドクォーターや米軍関係者の住宅もあり、独特の「治外法権的」な雰囲気が高い、風俗営業の取り締まりも緩やかで、深夜あるいは夜明けまで営業している店も多かったという。一種の「租界」的ムードが感じられた街だったというわけだ（馬淵、1989、90頁）。

「レオス」「シシリア」「ニコラス」「キャンティ」「アントニオ」「ハンバーガーイン」——当時六本木にあった代表的な店の名前をならべるだけでも、六本木がイタリア、フランス、アメリカなど、国際色あふれる街であったことがうかがえる。まさに、「異文化の光彩を発する街」であった（同、95頁）。

そんな街に、1954（昭和29）年に俳優座劇場が開場し、1959（昭和34）年には日本教育テレビ（NET：現テレビ朝日）が開局した。それに伴ない当然の成り行きとして、六本木は芸能人、映画関係者、演劇関係者、マスコミ関係者などのいわゆる「業界人」の集まる場所となった。

彼らとそのつながりで集まってきた裕福な家庭の子弟たちから構成されたのが、「第一次六本木族」（アクロス編集室編、1995、81頁）である。野坂昭如は、六本木族について次のように書いている。——「…厳密な意味でいうと、六本木族は、三十三年の夏に誕生し、三十五年には、すでに形はともかく、内容を失っている。その後にあられたのは、彼らのエピゴーネン達にすぎない。（後略）」（「変貌する夜の歓楽街・麻布六本木」『日本』1962年6月号）。この最初のグループこそが本来の本物の六本木族だということで、「純正六本木族」と呼ぶものもある（馬淵、1989、93頁）。この記事では、前者の本物の六本木族の一つの具体例として、「レオス」の Snackbar に集まるメンバーたちを「…ほとんどは、慶応の生徒、父親は大会社の社長クラスか、元大臣で、月三十万ぐらいの小遣いを使い、中には六台の車を持つ少年もいた」と紹介している。

菊村到もルポルタージュで、六本木族が金持ちの子弟であることにふれている。——「…かれらはほとんど裕福な家庭の子女である。かれらは善良な少年少女とは言えないが、いわゆる非行少年少女ではない。そういうものとは一線を画しているが、それはかれらの育ちのよさによってなのだ」（「夜を生きる街 麻布六本木」『日本』1961年7月号）。

このように、「純正六本木族」に該当するのは、1958年から1960年にかけての足かけ3年間というかなり短期間である。それ以降の、つまり1960年以降の「第二次六本木族」（アクロス編集室編、1995、81頁）には、中流家庭のハイティーンが参入してくることになるが、彼らはしょせんエピゴー

ネン（模倣者・亜流）であるというわけだ。流行の採用者カテゴリーで言えば、「第一次六本木族」は、革新者あるいは初期採用者であり、「第二次六本木族」は前期追随者ということになる。

そして、多くの族についても言えることだが、ひとつの若者現象・社会現象として彼らが世間一般に知られるようになるのは、エビゴーネンを含む程度にまで族が拡散し一般化した段階になってからのことだろう。

「街族」は、多くの場合特定の音楽や踊り（ダンス）と結びついている。六本木族の場合のそれは、「ドドンパ」だと言われている⁽¹⁾。1961年に発売された、渡辺マリの「東京ドドンパ娘」は、100万枚を超える大ヒットとなった。ハスキーでドスの利いた歌声が独特の雰囲気醸し出すインパクトのある曲である。しかし、この歌の大ヒットのすでに3年前から六本木ではドドンパが踊られており、東京タワーの展望室でドドンパのイベントが開かれたことも紹介されているので（アクロス編集室編、1995、84頁）、この歌も実は「あやかりソング」であったことがわかる。

「街族」には、また必ず分かりやすい表象として彼らに特有のファッションがあるのが一般的である。特に際立った「異装」こそ、「族」の最大の特徴で、その突飛な逸脱ファッションが、世間の注目を集めた矚躰を買うというのが、「族」の「族」たるゆえんだ。

ところが、六本木族の場合には、彼らに共通の装いというものが欠けている。そういう意味では、六本木族は「族」のなかでは珍しい例外的なケースだと言えるかもしれない。

六本木野獣会

「六本木族」というと必ず引き合いに出されるのが、「野獣会」あるいは「六本木野獣会」と呼ばれる集団である。もともと自然発生的に生まれた遊び仲間のようなものであるから、誰がいつ作ったかは明らかではない。ロカビリー歌手たちのファン（追っかけ）が、母体だとも言われる。

「映画、テレビ俳優の卵、デザイナー志望の少女、ジャズ歌手を夢見る少年、そういうものが、団結して売り出そうというのが『野獣会』のメンバーだ」（「深夜の“六本木族”を査察する」『週刊サンケイ』1962年3月12日号）という記述から推測すると、芸能界やファッション業界へのあこがれや野心を抱いた少年・少女の集まりだったのだろう。

田辺靖雄、峰岸徹、井上順、大原麗子、小川知子など、後に歌手や俳優として大成した面々もこのグループの出身者だということを考えると、「野獣会」はいわば“疑似芸能プロダクション”のような役割を担ったものと思われる。

そして、これは当時のメディア状況とのかかわりで見ることでもできる。1953年に放送を開始したテレビは、この時点においてはまだ“新興のメディア”にすぎなかった。映画俳優たちは、テレビのことを「電気紙芝居」とバカにし、出演を断っていたというのはよく知られたエピソードである。

そうした状況において、「野獣会」はテレビ出演者を確保するための貴重な人材供給源になったのではないかと思われる。ちなみに、「六本木族」の代名詞のように名前が上がる加賀まりこは、自らは「野獣会」のメンバーではなかったことを強調する⁽²⁾。映画プロデューサーを父に持つ彼女には、そのような“素人集団”と一緒にされては困るという自負があるのだろう。

演劇・映画の中の六本木族

六本木族は映画や演劇の題材にもなった。1961（昭和36）年には、増村保造監督の「うるさい妹たち」（大映、五味康祐原作・白坂依志夫脚本）が制作された。六本木のナイトクラブや深夜喫茶にたむろする無軌道な若者たち（六本木族）を通して、社会に問題提起をしようという作品だ。この作品の意図を増村監督は次のように語っている。——「かれら（六本木族：注引用者）はあくまでも、“少数派”だが、これを通して現代社会の停滞性、無道徳性を描き、おとなが見てくれるような映画にしたい」（『六本木族描く増村監督』『読売新聞』1961年11月4日）。出演者は、仲宗根美樹、川口浩、江波杏子、岩崎加根子など。

また、同じ映画では恩地日出夫の「非情の青春」（東宝、1962）がある。“現代青年が大人に成長する時にぶつかるいくつかの壁と、それに対決する姿”を描こうというのがこの映画の主題だが、制作の過程で六本木族の「野獣会」のメンバーと実際に行動を共にし、取材に当たっている点がユニークだ。教師役（白川由美、小泉博）の彼らより少し上の世代と若い彼らとの対比で、若者像をリアルに表現しようとしている。出演者の中には、「野獣会」のメンバーの高校生の一人として後の俳優・峰岸徹の本名・峰岸知夫の名も見られる（「六本木族」の中で取材——新鋭恩地監督が『非情の青春』『読売新聞』1962年2月5日）。

また、舞台（芸術座）では、同じく1962年に「六本木心中」（笹沢佐保原作・西島大脚本・菊田一夫演出）が上演されている。六本木族の女の子のリーダーが八千草薫、男の側のリーダーが新派の花柳武始、八千草に恋する学生が久保明という配役である。ドライで狂騒的な周囲の状況の中で、八千草と久保の清純な恋が芽生えるが、これに複雑な家庭問題や大人たちの三角関係が絡んでくる。その結果、怒りと絶望にあえぐ二人が殺人を犯したあげく心中するというのが、大まかなストーリーだ（「芸術座で『六本木心中』」『読売新聞』1962年7月18日）。

時期は前後するが、1961年11月公開の映画「狂熱の果て」（大宝）³は、ちょっと異色だ。自らも六本木族だという18歳の秋本まさみの同名の小説を原作としている。

この原作は小説としては、レベルの高いものではないと言われているが、“スピードとセックスに身を燃やす若い「六本木族」の生態を生き生きと描写している”という触れ込みだ。映画の製作者側も「六本木族の生態を通して、現代の若人のモラルを追求したい。“甘い生活”の日本版といった感じをねらっている。」と意気込みを語っている（「青春を突っ走れ！ 東京・六本木族の内幕」『週刊サンケイ』1961年5月15日号）。

こうした例をみると、「六本木族」という族は、それ自体芸能界やマスコミ業界に非常に親和性の高い「族」であったが、メディア作品として加工しやすい素材だったと言えるかもしれない。

以上の検討から明らかになったのは、「六本木族」という街族は、注目度は高い割にはかなり限定された若者現象であったことがうかがわれる。当時の若者全体からみれば、一部の突出した若者集団だったというわけである。しかし、だからといって、この族が当時の若者の特性について語るものが少ないということにはならない。

2. みゆき族

「みゆき族」は、1964（昭和39）年、銀座みゆき通りに出現した「族」のことである。みゆき通りは、銀座5丁目と6丁目の境を晴海通りと並行に伸びる道路の愛称である。「銀座みゆき通り美化会」のホームページには以下のような解説がある。——「……明治期には明治天皇が海軍兵学校、海軍大

学校等々への行幸の際、また浜離宮へのお成りの時、この通りを行幸路とされたため、いつしか『みゆき（行幸）通り』と呼称されるようになった（後略）」⁽⁴⁾。

この由緒ある通りが、若者現象の舞台、若者たちが集結する場所となったのである。1964年の5月頃から特に土曜日、日曜日になると多くのハイティーンの男女が集まり始めた。彼らは特になにをするということなく、ただ銀座の街をうろついていた。疲れると歩道にしゃがみ込んだり、店のショーウィンドーやビルの壁にもたれかかり立ち話をしたり、喫茶店で何時間もおしゃべりをした。

彼らが注目を集めたのは、そもそも“大人の街”銀座には不似合いの若者の集団であったことだ。さらには、彼らが特異なファッションを身にまとった若者たちだったからである。彼らのファッションこそ、有名な“アイビー・スタイル”“アイビー・ファッション”であった。アイビー・スタイルというのは、よく知られているように、もともとはアメリカの東海岸のハーバード、プリンストン、イエールなど一群の有名私大（アイビー・リーグ）の学生たちが身に着けていたファッションのことである。

みゆき族のいでたちは次のように説明されている。——主流の男性の場合は、髪はレザーカットで七三分け、パイタリス⁽⁵⁾などの新しい整髪料で仕上げる。シャツはボタンダウンが定番。無地の場合は白か淡いブルーが一般的。柄ものではアイビーストライプやマドラスチェック⁽⁶⁾。下はバミューダパンツにハイソックスか、裾がくるぶしから5センチ以上も上に来る丈の短いコットンパンツ（「すててこズボン」とも言う）に白のソックス。靴はスニーカーかスリッポン⁽⁷⁾。手には麻袋もしくはVANの紙袋を持っていた。

みゆき族の男性の場合には、これとはファッションの路線が異なる“コンチ派”（ヨーロッパ調コンチネンタル）もいた。彼らは、ウエストが絞り込んであるサイドベンツのジャケットに細身のネクタイ。先のとがった靴をはき、手にはアタッシュケース。好んだブランドは、JUN⁽⁸⁾。

みゆき族には女性もいて、彼女たちのファッションは次のようなものであった。——頭には三角に折った色もののハンカチをかぶっていた。顔は化粧気なく、日焼けした肌にアイシャドーとパールピンクの口紅といった程度。ウエストの後ろから大きく結んだ長いリボンを垂らしたロングスカートををはき、やや濃い目のストッキングにローヒールの靴をはくか、素足にビーチサンダルという場合もあった。手にはフーテンバッグと呼ばれたコメの紙袋やコー

ヒー豆などを入れる麻袋、もしくは竹や籐などの大きなかごを持ち歩いた。中身は着替えや外泊用品だった（くろすとしゆき「モードの街角②銀座 若者たちに占領された夏」『東京人』1996年4月号及び馬淵，1989，118-128頁参照）。

「平凡パンチ」とみゆき族

みゆき族を語る場合には、『平凡パンチ』という雑誌の存在を忘れてはいけない。『平凡パンチ』は、1964（昭和39）年4月に平凡出版（現マガジンハウス）から発売された20代をターゲットとする男性向け娯楽雑誌だった。創刊号の発行部数は62万部だったが、同年10月には75万部に、2年後の1966年には100万部を突破し、「『平凡パンチ』の創刊は戦後の出版業界における、最も劇的な最高の成功の一つ」（塩澤，2009，333頁）と言われるほど戦後出版史の中でも「伝説」となっている雑誌である。

そして、創刊号の表紙もまた「伝説」化している。当時まだ多摩美大の学生だった大橋歩のイラストが採用されたということ自体異例だが、彼女の作品は新しい読者層をターゲットとした新雑誌にふさわしい新鮮さを持ったものだった。無名の作者の作品を「前衛的な新しさ」と「わかりやすい大衆性」が調和的に存在している”として選んだ編集長・清水達夫の慧眼は高く評価されている（塩澤，2009，345頁）。確かにそのパステル画のような作品は、洗練されたいわゆる「うまい絵」ではない。むしろ稚拙にも見える素朴さを残したタッチだが、とにかく何とも言えぬ独特の雰囲気と魅力を持った、個性あふれる作品なのだ。彼女の一連のイラストは、いま見ても十分鑑賞に堪える⁹⁾。

この創刊号の表紙には、アイビー・ルックの若者たち（男性）の群像が描かれていたが、これがアイビー・ファッションの流行に大きな影響を与えたことは、これまた「定説」になっている。ビジュアル的にこれほどわかりやすいファッションのガイド（マニュアル）はないので、このイラストがアイビー・ファッションの伝道師としての役割を担ったことは想像に難くない。一枚の写真やイラストが、凡百の記事よりも大きなインパクトと影響を与えることがある。

VANとアイビー・ファッション

また、アイビー・ファッションを語る場合には、VANブランドとVAN

(株式会社ヴァンジャケット)⁽¹⁰⁾の創業者・石津謙介のことにふれないわけにはいかない。「メンズファッションの神様」とも言われるファッションデザイナーの石津謙介は、日本のメンズファッションの歴史に絶大な足跡を残している。狭い意味のファッションにとどまらず、日本人（男性）のライフスタイルや遊びに大きな影響を与えたと言われているが、みゆき族との関連で言えば、言うまでもなく彼らのアイビー・ファッションを演出した立役者として必ず引き合いに出される存在である。

みゆき族の背景には、“VAN=石津謙介というカリスマ的存在”が控えていた（宇田川，2006，146頁）というとらえ方は、その代表的なものである。同書の同じ箇所には、「みゆき族」現象の黒幕として石津が築地警察署に呼ばれたというエピソードも紹介されている。それに対し石津は、「アイビー大集合」というイベントを企画し、みゆき族を集め彼らを諭した結果、みゆき族は銀座から姿を消したという彼自身の回想も引用されている⁽¹¹⁾。

しかし、これらの定説には異論もある。清水（2012）では、『『平凡パンチ』は常にみゆき族を否定的にとらえていた』（192頁）し、石津謙介本人のみゆき族に対する評価は否定的なものだった（195頁）ことが指摘されている。「みゆき族」、「石津謙介=VAN=アイビー」、『平凡パンチ』という三者が堅固なトライアングルを構成し、一つの明確な若者文化を構成していたというのは、1980年代以降の後付けの記憶による社会的記憶の変容の産物だったというのがその主張だ。

みゆき族に関する「定説」や石津=VANの「神話」に疑問を投げかける非常に興味深い論考だが、本稿ではとりあえず基本は「定説」に従っておくことにする。特に、筆者はファッションの専門家ではないので、日本のファッション史において石津謙介が果たした役割については、宇田川（2006）、桐生（2011）、佐山（2012）などや石津謙介本人の著書に譲るとして、これ以上は深入りしない。

東京オリンピックとみゆき族

みゆき族も後述の原宿族と同様に取り締まりの対象となる。1964（昭和39）年9月19日、東京築地署は警視庁少年課の応援を得て、みゆき族の一斉補導を行い約100人が補導された（「みゆき族”百人一斉補導”『朝日新聞』1964年9月20日、「みゆき族 一斉に連行」『毎日新聞』1964年9月20日）⁽¹²⁾。みゆき族については、睡眠薬遊びや“性の乱れ”を指摘する記事も

ある（「みゆき族のSEX その探訪」『週刊女性』1964年10月7日号、「みゆき族の掟」『週刊大衆』1964年10月15日号）。従って、彼らの一斉補導は青少年の非行集団およびその予備軍の取り締まりという側面もあるが、地元住民への実害は、“店の前にたむろされては営業妨害になる” “高級な銀座の街にふさわしくない” という苦情からも明らかなように、被害は相対的には軽微なものであった。現に、上記の毎日新聞の記事には、高橋義孝（九州大学教授）の「取締りとは大人げない」とのコメントが見られる。“放っておいても鼻風邪のようなもので、時期が来れば自然になおる” というのである。

それにもかかわらず、警察はなぜそれほどみゆき族の取り締まりに躍起になったのかというと、これはよく知られているように東京オリンピックのためだった。“オリンピックで来日する外国人の目もある” “外国人に対して恥ずかしい” というのが、何よりの理由だった。1964年10月10日開会の東京オリンピックは、目の前に迫っていた。みゆき族に対する取り締まりは、東京オリンピックに向けての東京のクリーンアップ作戦の一環であった。

こうして、みゆき族は一掃されることになる。そのため、みゆき族は、街族としては非常に短命だった。しかし、若者のファッションに与えた影響は大きい。最先端のファッションの流行の担い手として注目された何よりもファッションの族であり、ストリート・ファッションの代表格である。

また、みゆき族は“男のおしゃれ” が一般化するはしりとなった。さらに、みゆき族はハイティーンとなった「団塊の世代」が担い手となる最初の若者現象だったという点は強調されて良い。「団塊の世代」は、その絶対的な数の多さにおいて、その後も社会現象として注目を集める様々な若者現象の当事者となって行くのである。

3. 原宿族

六本木族、みゆき族に次いで登場したのが、原宿を舞台にした「原宿族」である。舞台となった原宿とはどのような街であったか。原宿は、それまではどちらかというと東京の中では地味で目立たない場所だった。それが、1964年の東京オリンピックをきっかけに大きく変わったといわれている。「国際的」な雰囲気漂うおしゃれな街となった。

コープオリンピア、セントラルアパートなどの高級マンションが建てられ、デザイナー・モデル・タレント・ファッション関係者などのいわゆるカタカ

ナ職業の新住民たちが多く住むようになる。表参道は、“日本のシャンゼリゼ”などと呼ばれた。

この新しいおしゃれな街に集まってきたのが、原宿族である。特に明治通りと表参道の交差点付近が中心的な集結場所となった。高級スポーツカーで乗りつけクラクションを鳴らし、轟音をあげ、急発進・急ブレーキを繰り返した。時には、表参道でカーレースを展開した。時折、車から降りて道路沿いのドライブイン、レストラン、スナックバー、喫茶店などで軽食を取ったり、モンキーダンスを踊ったり、女の子をナンパした（アクロス編集室編、1995、94頁）。

自動車という新しい小道具と結びついているところが、原宿族の一つの大きな特徴である。ずばり、「未曾有の好景気とモータリゼーションの波動にいち早く共振した〈族〉」（馬淵、1989、145頁）であり、「モータリゼーションの鬼っ子+街族」（同、160頁）というわけだ。

彼らが登場した1966（昭和41）年は、まさに「いざなぎ景気」の真っ只中、サニー（日産）、カローラ（トヨタ）という二大大衆車が発売され、「マイカー元年」とも言われた。車は、3C（Car, Cooler, Color-TV）の中の重要なアイテムで、「新三種の神器」として注目された。トヨタスポーツ、ニッサンシルビア、コンテッサクーペ、コロナハードトップ、ファミリアクーペ、スカイラインGT、ホンダスポーツ、ベレットGT、フェアレディ1500といった、遊びの車＝スポーツカーも続々と登場してくる（同、144頁）。

免許人口は、1955（昭和30）年に300万人だったものが、1965（昭和40）年には2,000万人へと急増したという。そのうちの4分の1は20歳から24歳の若者が占める。何よりも車は若者にとってあこがれの対象であり、“青年にとって、ときに恋人以上に魅力のある存在”だった。スピードとスリル、自由な密室がその絶大な魅力の源泉だった（「自動車と若もの」『読売新聞』1966年2月13日）。

この記事（コラム）には、原宿族が乗り回す車の多くが自家用車ではなく、“貸し自動車会社”からの借り物で、中には自家用車に見せかけようとナンバープレートに細工を施したものがあることを伝えている。“貸し自動車”という表現がいかにも時代を感じさせるが、若者のこの車に対する情熱と執着ぶりには、車に興味を示さなくなったと言われる今日の若者との間のギャップの大きさを改めて考えさせられる。

社会問題としての原宿族

みゆき族は、その「異形異装」によって地元住民や銀座を訪れる人々から顰蹙を買ったが、彼らと与える迷惑は“汚い、場違い、目ざわり”程度のものであった。一方、原宿族は騒音という実害を伴うものだった。騒音などの被害に対し、地元住民は「生活環境を守る会準備会」を結成した（「もうガマンできぬ——原宿族」『朝日新聞』1966年11月6日）。

過去に、いわゆる“温泉マーク”（連れ込み旅館）を追放し、「文教指定地区」を勝ち取った土地柄だけに住民の意識は高く、地元住民の対応は迅速で、さまざまなレベルで住民組織が結成されていくことになる。さらに、区議会、都議会、最後は国会においてまで原宿族問題は取り上げられ、大きな社会問題にまで発展した（「原宿族の取り締まり 区議会など動きだす」『朝日新聞』1967年6月23日、「深夜の公害」明日国会で追及 原宿族 青山族 都議会では今日追及」『読売新聞』1967年6月27日）。

原宿族による騒音公害というのは、どのようなものであったのか。マフラー（消音装置）をはずした重低音の走行に伴って発せられる騒音が第一であることは言うまでもない。表参道の直線道路をエンジンを目いっぱいふかしながら猛スピードで走り抜けるのだから、たまったものではない。道路をまるでサーキット場代わりに、わがもの顔に走り回る彼らは、別名“サーキット族”とも呼ばれた。

しかし、彼らが発する騒音はそればかりではなかった。すれ違う車同士があいさつ代わりに発するクラクション音である。奇妙なトーンで大音響で頻繁にかかわされるこのクラクション音がいかに耳障りなものであったかは、容易に想像できる。本来の会話では、語るべき話題もことばを持たない彼らを皮肉をこめて「“車話”族」と呼んでいるものもある（「今日の話 “車話”族」『朝日新聞』1966年11月9日）。

原宿族は朝日新聞の社説でも取り上げられている（「“原宿族”を生んだもの」『朝日新聞』1967年7月1日）。そこでは、彼らは「社会的連帯感を全く喪失した失語集団」と断じられている。——「彼らにとって言葉はほとんど不要である。彼らの話題は、人生の生き方についてではなく車の性能についてだ。その関心は人間の心のかわりにファッションに、恋ではなくセックスに向けられる。だから彼らの会話には、ただ数個の形容詞があればこと足りる。話すことがないから、バカ騒ぎでもするよりほかなくなるのだ」（同）

というわけである。先のコラムとまったく同じ趣旨である。

そして、その原因を人間教育が欠落し、ものを覚えさせることに熱心なあまり、ものを考えさせることを忘れてしまった戦後の新教育と、もの分かりのよい放任主義の家庭教育に求めている。結びは、“学校と家庭に今までの教育としつけのあり方について反省を求める”という、いかにも良識派の新聞の論評の典型であるが、当時の世間一般の原宿族の受け止め方の一端がうかがわれ、興味深い。

原宿族が地元住民に与えた迷惑は、騒音問題だけではなかった。“風紀問題”も深刻なものとして受け止められていた。原宿族を取り上げたある週刊誌記事は、そのリード文で次のように書く。——「ヒ弱いもやしのような若い遊び人の集団“原宿族”に、ようやく世間の批判がきびしくなった。犬のように道路上でセックスを楽しんだり、真夜中、爆音を立てて車をブツとばす、良識欠如の若者たち——」（「深夜の狂態“原宿族”の知能程度」『週刊大衆』1966年12月1日号）。彼らの奔放な性行動も、もう一つの環境破壊として地元住民の鞆を買った。

しかし、ひと口に原宿族といっても、厳密に言うといくつかのグループに分かれるようだ。車を暴走させるサーキット族やそれを見物に来る野次馬たち。深夜スナックや深夜レストランなどの店にたむろするグループ。それらに対し、「カスミ（かすみ）会」「侍さむらいの会」「ソサイエティ・オブ・ヤング」などを名乗る“元祖”原宿族を自称するグループがあったという。彼らは、車を乗り回す連中を“カーキチ”あるいはカーキチが集まるドライブインの名をとって、“ルート族”と呼んで軽蔑し、「あいつらと一緒にしてほしくない」と言う。

特に、この中の「カスミ会」は、「六本木野獣会」の後継を自任している。メンバーは、俳優、歌手、タレント、ファッションモデル、デザイナーなどを目指し、リーダーは一種の芸能プロダクション的役割を果たそうとしている（「原宿族カスミ会を結成！」『サンデー毎日』1966年7月3日号、「くたばれ！ 原宿族」『週刊朝日』1966年11月25日号）。

若者集団には、往々にしてこのようなことが起きる。外部の人間から見ると“同類”にしか見えないが、当事者の意識としてはあくまでも別物なのだ。彼らにとっては、小さな違いこそが重要なのである。

そして、お決まりの“一斉補導”となる。最初の一斉補導は、1966年の10

月初めに行われた。警視庁少年一課と原宿署の私服警官 60 人が出動し、少年約 50 人を補導したとの記事がある。時間外営業や照度違反の店も摘発された（「原宿族、初の一斉補導 違法の店や駐車も摘発」『読売新聞』1966 年 10 月 2 日）。

次に、『朝日新聞』1966 年 11 月 13 日の朝刊には、原宿署と警視庁交通部、防犯部が警察官約 70 人を動員して、12 日夜から 13 日未明にかけて原宿族の一斉補導を行ったとの記事が見られる。約 50 台の車が検問を受け、整備不良 6 件、無免許 1 件、酒気帯び 1 件が検挙され、15 人が誓約書を取られたとある（「“ハタ迷惑” 許さぬ。原宿族をいっせい補導」）。

この記事ではふれられていなかったが、別の記事では同日の特別取り締まりで、22 人の未成年（うち女 9 人）が補導されたとある。また、9 月から毎土曜日原宿署が行ってきた取り締まりによって、すでに 303 人が補導され、違反車 67 台を検挙したという記述も見られる（「“原宿族” 取り締まり」『読売新聞』1966 年 11 月 13 日）。

冬を迎え、一時姿を消したかに見えた原宿族は、翌 1967 年春以降再び現れ始め取り締まりが再開されることになったようだ。6 月に入って、まず東京の代表的な盛り場を対象に警視庁の掃討作戦が始まり、さらに 6 月下旬からは原宿を対象にした重点的な取り締まりも始まっている（「原宿族など手入れ 警視庁 “掃討” へ一か月作戦」『読売新聞』1967 年 6 月 21 日、「“深夜の公害” どうやら追放 連夜の摘発半月で」『読売新聞』1967 年 7 月 15 日）。

後者の記事では、約半月の取り締まりで、深夜飲食店では逮捕の 2 件を含む 65 件を摘発、交通関係では車両違反や駐車違反など 267 件を検挙、67 人の少年を補導したとある。この記事では、原宿族の“公害”が沈静化したことがうかがわれるが、その後も 9 月中はまだ取り締まりや摘発の記事が見られる（「“穴倉バー” 一斉査察」『読売新聞』1967 年 9 月 7 日、「“深夜公害” 950 件摘発 警視庁、原宿族やエレキ騒ぎ」『読売新聞』1967 年 9 月 13 日）。

しかし、それ以降は原宿族関連の記事は姿を消す。新聞記事から推測できるのは、原宿族騒動は 1965 年の夏から 1967 年の秋まで、約 2 年間ほど続いたものと思われる。原宿族は、みゆき族ほどではないにしてもやはり短命の流行現象だったことが分かる。

最後に、原宿族を同世代の若者はどのように見ていたのか、その一例をあげておこう。原宿族を特集した記事の中で、“夏休みを利用して神宮前の喫

茶店でアルバイトをしている大学生 A 君” の声が紹介されている。

彼らは思想なんかなんにももっていない、ただもっているものは、その日を何でもかでも楽しく過ごせれば、それで満足だという連中だ。だから、僕から見れば、そろそろ始まる試験をどうするんだといったくなる。たまにはベトナム戦争や、中国の紅衛兵の話が出ると、オレたちには関係ないんだと、全然別の世界でやっていることだと決めつけているようだ。その証拠に、ここに来る女の子の前でそんな話をいうのはタブーになっているんですよ。（『原宿族』の奇妙な青春』『朝日新聞』1966年9月13日）

この時期は、すでにベトナム戦争が始まっている。学園闘争・学生運動の嵐も目前に迫っている。そういった中で、彼らは究極のノンポリ、究極の軟派（ナンパ!）であった。実にノー天気な族である。

おわりに

以上、六本木族、みゆき族、原宿族という三つの「街族」を再検証してきたのだが、明らかになってきたことは何か。何よりも「街族」は、その名前の通り特定の地域・エリアに集う若者集団である。

従って、「街族」は物理的空間を共有し成員同士が直接接触を行う集団という意味では、「群衆」(crowd) の一種と見ることもできる。みゆき族のように、他者からの視線を意識したパフォーマンス性の高い“見られる集団”には、表出的群衆 (expressive crowd) という名前がふさわしいかもしれない。

また、その集団に物理的な攻撃行動が伴うようになると、それは「乱衆」(mob) となる。原宿族のように、騒音という“音の暴力”によって他者に被害をもたらす街族は明らかに「乱衆」の域に達している。集団の特性に注目すれば、「街族」はいわば現代版「群衆」であり「乱衆」である。

別の言い方をすれば、「街族」にとっては場所（トポス）が中核的な要因であるから、場所性・現場性が重要となる。そこに集うことに伴うライブ感・臨場感が求められ、それがメンバーにとっての魅力ともなる。成員にとっては、文字通り“身をもって体験する”ことが必須で、そこで得られるリアル

な充足感が求められる。

また、一般的に「族」と呼ばれる現象は、流行の種類で言うと、流行の受け手がある集団の成員に限定される「特定集団内の流行」の典型例でもある。「特定集団内の流行」の採用者にとってそれが果たす機能は、内に対しては成員同士の連帯感や結束を高め、外に対しては自分がある特定の集団の成員であることをアピールし、何らかの優越感を味わうことである（市川、1993、14-15頁参照）。その場合、ファッション（衣服・小道具）は、共有された分かりやすいシンボルである。

ここでは共有された表象の微小な差異が、大きな意味を持つ。ちなみに、若者たちの様々な「族」は、英訳したら“tribe”となる。これは、いわゆる未開社会の「部族」と同じである。“小さな違い”をめぐる争うのが部族の特性だ。部外者にとってはその区別が分からないことが多いが、当事者にとってはその小さな違いが重要になってくる。

三つの「街族」についての語られ方はどのようなものであったらうか。——「族」をめぐる引き起こされる議論・論争は、一般的に言えば広い意味の“いまどきの若い者は…”言説である。これは、メディアが大好きなそしてまた受け手も好むテーマである。手っ取り早く受け手のニーズに応えることができるので、送り手側も取り上げやすい、“商売にしやすい”格好のネタなのである。

暑いと言っては嘆き、寒いと言っては嘆く、天気に対する不平不満のように、若者についての語りは尽きることがないからである。紋切り型の定番と分かっているにもかかわらず繰り返されるのはそのためである。「街族」についての語りも、基本的にこの図式に沿ったものである。

本稿で扱った三つの街族に共通する語りは何か。一つは、彼らをあたかも自分たち先行世代とは違う「珍獣」のようにみなし、まずその存在に興味を示し、その「生態」に注目し、「生態」を探る。好奇心な目を向けると同時に、そこでは必ず既存のモラルに反する彼らの“無軌道な”振る舞いに対する当惑と怒りが表明される。

さらには、非行集団あるいは非行予備軍（不良！）として非難し、取り締まりの対象とする。とりわけ、その性的逸脱に対する驚きと嫌悪感が表明されるのが定型である。そこでは、慨嘆が主要なトーンとなる。彼らに対する語りはこれらの点で共通している。

当然のことながら、この族についての語りの主要な場は、メディアによって提供される。族はメディア（マスコミ）によって注目され、メディアに取り上げられることによって族となる。メディアによる特定の若者集団への注目→〇〇族としてメディアが取り上げる（命名・誕生）→〇〇族の増殖→〇〇族の流行現象化→“〇〇族の流行現象”としてメディアが再度取り上げる→〇〇族の拡大に一層拍車がかかる。

族の誕生から成長拡大過程には、上記のようないわゆる「自己達成予言的メカニズム」が働いている。族がメディアの関与なしには、存在しえない。“メディアが族をつくる”とはそういうことである。

族に関する議論の締めには、野坂昭如に再度登場願おう。彼は、「フーテントピア 現代若者考」というエッセイの中で、やたらと「族」と名付け、若者の一群をとりざたするのは、“鶏が、自分の産んだ卵を眺めて、どうも近ごろの卵は姿が悪いとぼやいているようなものだ”といった上で、次のように書いている。

当節は季節季節のきまりもののように、さまざまにレットルをはって脅え、騒ぎ、丸くても細長くても、殻を破って出てくるヒヨコはそう突拍子もないものではないのに、今の鶏たちは、鬼が出るか蛇が飛び出すかとうれい、さらにそのように異様な形の卵をひり出した自分の身体に何か異変が生じているのではないかと、自己反省しノイローゼとなっている。…(中略)…しかし、卵の奇形をおのが「鏡」とし、そこにうつるおのが形におびえるよりは、むしろ「鑑（かがみ）」として、より積極的に、奇形を利用し、将来の予見に利用するべきなのだ。…(中略)…むしろ卵の中の潜在意識が生み出した、未来像と考え、これを研究することで、将来への展望がひらかれるといってもいい。(後略) (『読売新聞』1967年9月2日)

ここには若者現象を分析することの意義の本質が、文学者らしい巧みな比喩で語られている。拙稿（市川、2012, 2013）でも繰り返したように、若者現象とはたとえどんなに異様に見えようと、常に時代を先取りし必ず将来の社会現象を予言しているものなのである。

「六本木族」には、高度成長期を通して一般化していく食文化をはじめとする欧米文化とライフスタイルの受容と享受が、「みゆき族」には男性のお

しゃれ文化（「ピーコック革命」!）が、そして、「原宿族」には車社会と性の解放が先取りされている。

また、そこには高度成長期の最盛期の人々の生活意識や生活感覚、その時代の人々のものの考え方・感じ方が何らかの形で反映されている。そこからうかがい知ることのできる、時の流れにつれて徐々に変化をみせる「社会心理」のありようをすくいあげる作業は、興味深いテーマであり続ける。

《注》

- (1) 俗説では、「ドドンパ」とは、都々逸（どどいつ）とルンパの合成語だと言われている。日本で演奏していたフィリピンのバンドの独特のマングが起源だという説もある。美空ひばりにも、「ひばりのドドンパ」（1961）という歌があり、2004年には、氷川きよしが「きよしのドドンパ」なる曲も出している。みゆき族の場合は、ツイストとサーフィン、原宿族の場合は、モンキーダンスとエレキ音楽ということになる。
- (2) ラクティブ六本木【六本木オフィシャル情報サイト】<http://www.ractive-roppongi.com/> 2013.9.22 閲覧。
- (3) 当初は新東宝の作品として企画されていたが、新東宝の倒産により新たに設立された配給会社が「大宝」である。
- (4) 「銀座みゆき通り美化会」http://www.chuo-shokogyo.jp/syoutngai/kameidantai/kaimei_info/kaimei_info_16.html 2013.10.20 閲覧
- (5) 「バイタリス」は、1962年にライオンから発売された男性化粧品。翌、1963年には、資生堂から男性化粧品の「MG5」が、発売となった。
- (6) もともと、インドのマドラス（現チェンナイ）地方産の、大柄格子縞の綿織物のこと。
- (7) 靴ひもなどがなく、簡単にはける靴。語源は、slip-on（スリップオン）。
- (8) 1958年創業の株式会社ジュンのブランド。VANと並ぶ当時の代表的な男性ファッションブランド。
- (9) 大橋（2003）には、1971年の390号までの表紙が、そのまま再現されていて実に見ごたえがある。
- (10) ルーツは、1951年に大阪で立ち上げた石津商店である。東京進出の1955年に株式会社ヴァンジャケットは設立された。
- (11) 桐生（2011）も、VAN協賛の「アイビー大集合」というイベントが銀座ヤマハホールで開催されたとしている（150-151頁）が、清水（2012）はこのイベント自体の実在性にも疑問を投げかけている（198頁）。確かに、その開催日時を12月2日としているところなど疑問は残る。これとは別に、モデルグループ主宰の22歳の女性が開催を企画した「アイビー大集会」（1946年12月2日、リキスポーツパレス）の記事が見られる（「VAN党結党宣言」アイビー大集会を主催する女性総裁への期待と不安『平凡パンチ』1964年12月7日）。
- (12) 同日付の読売新聞では、補導した人数が200人となっている（「みゆき族」200人補導『読売新聞』1964年9月20日）。みゆき族の数については、200～

300人とするものから300~400人（休日はその倍）とするものまであり、実際にどの程度の規模であったかを確定することは難しい（真鍋博「都会のキリギリス 話題の“みゆき族”を見る」『朝日新聞』1964年9月20日参照）。

参考文献

- 赤木洋一（2004）『平凡パンチ 1964』平凡社
 アクロス編集室編（1995）『ストリートファッション 若者スタイルの50年史』PARCO
 阿久悠（1999）『愛すべき名歌たち』岩波書店
 市川孝一（1993）『流行の社会心理史』学陽書房
 市川孝一（2012）「戦後復興期の若者文化の一断面——『アプレ犯罪』を中心にして——」『文芸研究』（明治大学文学部紀要）第116号
 市川孝一（2013）「高度成長期の若者文化——『太陽の季節』と太陽族ブーム」『文芸研究』（明治大学文学部紀要）第119号
 石津謙介（2010）『石津謙介 いつもゼロからの出発だった』日本図書センター
 桐生典子（2011）『ええかっこし 評伝石津謙介』朝日新聞出版
 くろすとしゆき（2001）『アイビーの時代』河出書房新社
 馬淵公介（1989）『「族」たちの戦後史』三省堂
 難波功士（2007）『族の系譜学 ユース・サブカルチャーの戦後史』青弓社
 野地秩嘉（1994）『キャンティ物語』幻冬舎
 大橋歩（2003）『平凡パンチ大橋歩表紙集』イオグラフィック
 Rogers, E. 藤竹曉訳（1962=1966）『技術革新の普及過程』培風館
 佐山一郎（2012）『VANから遠く離れて 評伝石津謙介』岩波書店
 塩澤幸登（2009）『平凡パンチの時代』河出書房新社
 島崎今日子（2013）『安井かずみがいた時代』集英社
 清水一彦（2012）「“みゆき族”の社会的記憶変容における『平凡パンチ』とVANの役割」『出版研究』43
 世相風俗観察会編（2009）『増補改訂版 現代世相風俗史年表 1945-2008』河出書房新社
 Smelser, N. 会田彰・木原孝訳（1962=1973）『集合行動の理論』誠信書房
 宇田川悟（2006）『VANストーリーズ 石津謙介とアイビーの時代』集英社
 渡辺明日香（2011）『ストリートファッション論』産業能率大学出版部
 吉見俊哉（1987）『都市のドラマトルギー 東京盛り場の社会史』弘文堂